

異性の愛の研究

——無言にして要領あり——

私は先達て淺草の三友館で、新派悲劇と銘打った「八重山吹」といふ活動寫眞を見た。一體私は活動寫眞といふものをあまり好かない。殊にあの辯士の假色交りの新派劇を見せられる位、不快な感じのすることはない。皮相な道德や薄っぺらな人情を遣つて、女に粧った男や貴族に扮した人達が、口先手先で人に同情を強いようとして居るのを見ると、自分の眞實と情緒を侮辱されるやうな、厭な感じがしてならない。こんなことは今の場合まあ横道ではあるが、其日も番組に依つて仕方なく、あとのカンツリーダンスを見る爲に、輕薄に動いて居る灰色の影の人達を眺めて居た。初め辯士が「八重山吹」といふ題のよるところを説明したのによると劇中の女主人公は子爵の娘と生まれながら、人に嫁すことの出来ない秘密を持った身で、それが爲に悲劇を醸すといふ、七重八重花は咲けども實は結ぶこと能はぬ云々と、さてこそ古い比喩が復活された譯なのである。などは例によつてお決りの後妻の姦計、自分の實子を家督にしたい爲に、先妻の娘なる女主人公を他に嫁せしむべく子爵に迫り、子爵はまた娘に結婚を説く、不具の娘は飽く迄も秘密を包んでそれを拒む、そこに例によつて例の通りな葛藤を生じ、結局娘は、乳兄弟の不義の濡衣をそゞぎ、父を安心させる爲に涙を隠して結婚を承諾する。さて悲劇の初まりはそれからで、結婚はしても夫の意には従はれない爲に、品行方正であつた夫が盛んに道樂を初める、妻の愛なきを責め、蹴り、打ち、終ひには離縁を言ひ渡す、さられたる妻は此儘邸には歸られぬといつて母の墓前にわが身の不幸を嘆じ、毒藥を仰いで死んでしまふ、其書置によつて初めて女主人公の秘密がわかり、夫の軍人は息も絶え絶えの妻を引起して、せめては何故自分に一言打明けてくれなかつたかと嘆き、七生までも夫婦であることを誓ふと、妻は苦しい息の下から夫の腕に縋りつくところで幕になる。

パツと電氣がついて人の頭が動揺く。私は傍のK氏を振向いてから言つた。

『事件に刺戟された感情が、一圖にあゝは盟ふものゝ、果して妻が死といふ方法を取らず

に、自分の秘密を打明けた場合、あゝ誓ふに躊躇しなかったでせうか——よしんばそれは出来ることであり、また出来たとしても、果してあの熱い感情を永續させることが出来るでせうか——？』

『さア——』とK氏は云った。私は其顔を凝乎と見て居た。この場合、私は女全體を代表して、男の心をK氏の答へによつて聞かうとでもするやうであつた。

『夫婦となつて居ることは出来る。併し其感情の交渉なり關係なりは極々淡いものとなつて行くだらうね』

『果して！』と私の胸は其時言つた。そして寂しく頷くより外なかった。よしや男が心を飾つてそれを否定してもさうあることを私は此頃ひとり感じて居る。

問題は戀愛と結婚といふことになるかも知れない。併し戀愛を語る時に、結婚といふことの附隨して來るのは自然であつて、この二つは切つても切れぬ關係を有して居ると思ふ、男が女を戀する、女が男を慕ふ、そして其愛情の流れの解け合ふところは何だらう？ そこにはチャアンと結婚といふ窪みが控へて居る。併し戀愛が必ず結婚まで行かなければならないかといふのは問題外で、そこに行くまでの途中、横道に反れて行くのはいくらもある。或る感覺の鈍くなつた時は戀愛の最後で、そこから一步積極的になればもう結婚の領分である。「たとへそれが世間に認められた結婚であれ否とであれ」こゝまでは未だ自由と我儘が自己の體に附屬して居る。だから引つかへすことが出来る。別れることも容易である。男の手腕はこゝで現はれねばならぬ。そして男の勝利は積極的な態度にあるのである。女は弱い、弱い弱い故に反對な強さを要求して其力にひきずられて行く。

結婚は決して戀愛の連續ではなかった！ かう思つて妻が夜具の襟冷たく昔戀しさの思ひに泣いて居る時、夫の寢息は安らげくそして規則正しくあるであらう。

『男つ位我儘で、勝手に、そして動物的なはありません』と或人の手紙の中に書いてあった。

『女があとになつてそんなことをいふのは、僕は可笑くつて仕様がな』とそれを見せられた男の一人は、鼻のあたりに笑ひを泛べて居た。

女よ、女よ、お前は其時必と男の胸に武者ぶりつきたかつたであらう。そしてすべてを

男に許さぬ前に、三越を買ひ^しめなかつたことを、またそれまでの男の言葉を蓄音器に、
跪き^{ひざまづ}もしなかつた其行爲を活動寫眞に取つて置かなかつたことを悔いたであらう。

女を得るまでの男には時間と經濟の觀念がない——やうに見える。

併しながら男を侮蔑するのを止めよ。

それは女自身をも侮蔑するからである。

あの人の行爲が結婚前と結婚後と變らうと、それは皆あの人の知つたことではないのだ。
みんなあの人の本能がさせる業^{わざ}なんだ。愛情を獨立したものだと思つて居るのは間違ひなんだ。

『私、やっぱり髭がない方がいゝわ』

『どうして？』

『だって……だって其方がいゝんですもの』

『だって如何^{どう}したんだい』

『だって……』

『ハ……』

たわいのないのは戀である。無言で要領を得るのも戀である。

戀の出来ない人は無いと思ふ。戀しようとして出来るものではなく、すまいと思つてされないものでもない。たゞ現はすと現はさないと、燃えると燃えないと、濃いと淡いと、深いと浅いと、すべて唯程度の問題である。薪^{たきぎ}がなければ火は燃えぬ。燃えまいとしても、
燐^{りん}に燐寸^{まっち}を投げられゝばパツと燃えたつ。たゞ客觀性或は理性は水に相當して居るから、
これらを多く持った人に熱烈な戀は出来ないのは云ふまでもない。だが決して戀が出来ないと云ふのではない。戀して戀に満足することすら出来ないといふのは、戀そのものに不満足なのではなく、其對手に不満足なのであらうと思ふ。

女にとって男の容貌は決して重大な關係を有して居ない。かういふと男は必と不思議だといふやうな顔をする。實際男には女の器量が第一の要件になつて居るらしい。女はただ強い強い力を男に發見して満足するのである。

崇拜の極に生じた戀愛は謙遜である。

同情の結果の戀愛は犠牲的である。

お互に美點或は共通點を發見して、歡喜の情の變つて行つた戀は智的である。

感謝の念の嵩^{かう}じて生まれた戀愛は献身的である。

容貌或は觸覺^{じやくき}から惹起された戀は肉肉的である。

昔の女の戀に對する態度は積極的だつたと思ふ。

時姫や初菊の、やいのやいのと口説きたてる手腕は、容易^{たやす}く戰場にのぞむ男の心を殘させるに成功して居る。あの自己の心によりよく忠實であられた單純な心持が羨しい。その心持を養つた其頃の周圍の單調も羨しい。

『彼女の胸には算盤あり』と獨歩は信子を呪つた。氏に呪はるゝまでもなく、信子自身も亦自らをさう呪つて居たであらう。

私はルーヂルの中のナターリアのやうな女を妹にして、近松の劇に現はれたやうな女を姉に持ちたいと思ふ。

實際的な戀と、空想的な戀と、前者はこれを見、後者の戀は女がする。處女ならば殊に決して實際的な戀はしない筈である。たゞ人を戀し、或は戀を戀して、其先に肉があることなどは知らないで居る。たとへ知つて居ても卑しんで居る。結婚といふことを未來に漠然と意識しながら、この二つを個々別々なものであつて、戀愛は戀愛として獨立して居るものと思つて居る。男はそれを齒^{はが}痒^がゆさうに眺めて居る。さうして一朝其夢が破りさられた時に、女は男を憎んでしかも強く愛するやうになる。男は形勢を一變して一步も、貸さないやうな強い態度になる。

悲しいかな女の肉體は靜止して居る爲に、受動的であるが故に、一步積極的に出て男に勝つことは永久に出來ないのである。だが決してそれが愧^はづべきことでないことはいふまでもない。

戀愛は善でもない。惡でもない、また美でもなく醜^{しう}でもない。神聖なる戀などゝいふ文字は、戀愛を料理した滑稽さを思ひ出させるに過ぎないではないか。

【入力者注】以下の修正を施しました。（数字は底本の頁・行）

43-16 畜音器^い、 ↓ 蓄音器^に、

底本…「水野仙子全集」第五卷

初出…「新婦人」第一卷第九号明治四十四年十一月

テキスト入力…小林 徹

公開…令和三年十月三日

改訂…令和四年一月三十日

[リンク…水野仙子「作品年譜」](#)

[水野仙子ホームページ](#)